

随想録

宇佐見 太 市

(一)

第二次世界大戦後の「団塊の世代」（第一次ベビーブーマー）に属する筆者（昭和 25 年 2 月生まれ）は、学生時代には海外渡航や留学の経験は全く無く、ただひたすら故国・日本の大学ならびに大学院（修士課程・博士課程後期課程）で合計 9 年間、英語教育と英米文学の研鑽を積んだ。

家父長的家族形態のなかで育った筆者は、実業界で禄を食む父親が強く勧める経済学系の学部はしっくりこなくて悩んだ挙句、二浪して自分の意思で、1970 年（昭和 45 年）4 月に奈良教育大学教育学部・文科英語専攻（＝英語科）に入学した。吹田市の千里丘陵で大阪万博（EXPO'70）が開催されたのが、ちょうど入学一か月前の 3 月であった。その 6 年前の 1964 年（昭和 39 年）10 月の東京オリンピックのときは、筆者は中学三年生で、高校受験を控えていたがゆえに、世を挙げての英会話ブームには無関心だったが、1970 年の大阪万博のときは 20 歳で、時流に乗って、筆者は英会話活動にのめり込んだ。具体的には、奈良教育大学の ESS クラブの活動に精を出し、さらには少しでも英語に触れたい一心で万博会場に日参した。すべて英会話の実地訓練のためだった。また当時、近鉄奈良駅前にあった奈良立聖館学院（大越俊夫院長）主催の弁論大会・企業との合同英語合宿・講演会等の諸行事にも、積極的に参加した。当時の若き俊英・大越院長のご好意にあまえた次第である。

翌年の 1971 年の夏には、奈良教育大学助教授・佐藤秀志先生（当時）のご推挙で、公的機関である COLDT（Council on Language Teaching Development、財団法人・語学教育振興会）主催の ITC（東京八王子大学セミナーハウスでの夏季英語集中訓練）に、筆者は、奈良教育大学の学生代表として参加させていただいた（1972 年 4 月発行の機関誌『国際人 第 2 号』に、筆者を含めた受講生 54 名の集合写真が掲載されている）。ITC の指導講師陣には、若き日の島岡丘先生、東後勝明先生、池上嘉彦先生、そして山田玲子先生等がいらっしやった。二週間のオールイングリッシュの夏季集中訓練の合宿で、日本語厳禁ゆえ、筆者にとっては息が詰まる毎日だったが、オフの日曜日には銀座に出て、炎天下の歩行者天国を満喫したものである。銀座を闊歩している長髪にジーンズの男性たちやミニスカートの女性たちに混じって、筆者は、銀

座三越百貨店一階に日本第1号店として開業したばかりのマクドナルドのハンバーガーを食べながら歩いたのを覚えている。歩行者天国にマクドナルド、そして英会話。これらは我が青春の貴重な一ページである。

あの頃の筆者は、あまり深くものごとを考えることはせず、単に英語を自在に駆使できることが楽しくてたまらないという、そんな能天気で外向的性格の若者であり、無邪気に思い切り青春を謳歌していた。当時の筆者にとってのバイブルは、『英語の話し方』(サイマル、1970)と題する本で、その著者・國弘正雄(1969年の月面着陸・アポロ11号打ち上げ時の同時通訳者のひとり)は、筆者の憧憬・理想の人であり、彼が出演するテレビ番組「英会話中級」は必ず見たし、また関西圏での彼の講演会には出来る限り、足を運んだものである。また、当時、梅田にあったアメリカ文化センターにも筆者は、しょっちゅう通い、アメリカから来日する著名な作家たちの講演を熱心に聴いた。「聞く・話す」という英語運用能力を高めたいという想いで一杯の典型的な「英語青年」だった。

しかるに他方では、当時の筆者は、己の精神的未熟さ・軽佻浮薄と智力不足に嫌悪感を抱いていたことも事実である。他人を騙すことはできても、己を騙すことはできない。少なくともそのような自己客観視はできていたと思う。現実の外界にのみ目を向けがちの、ひとつ間違えば軽薄な外向的青年というイメージを払拭して、内面的・精神的世界に沈潜できる「心の深い人」に軌道修正したいと、密かに腕き始めていた。心の空洞を満たしたいという思いが人一倍つよく、何かを必死に渴き求めていた。英語を流暢に話したり書いたりすることはもちろん大事だが、その前提として、英語を使う本人自身の確たる価値観・世界観・人生観や高度な文化的成熟度が存在してしかるべきだと痛感・認識し、心身ともに均衡のとれた、教養のある知的青年像に少しでも近づきたかった。

そんなときに琴線に触れたのが、奈良教育大学英語科が開講している上級クラスの密度の高い英文学や仏文学の授業であり、これまでの英会話一辺倒の勉強姿勢から徐々に、英米仏の文学作品と真摯に対峙しうる文学青年へと変わろう、と密かに決意した。当時の奈良教育大学英語科は、国立大学としては日本一小規模の学科(英語科一学年の学生定員は、たったの6名)で、先生方の個人研究室内での少人数授業がほとんどであった。今から思えば、大学院並みの高度な授業であったと思う。さらに、英語・ドイツ語・フランス語の専任教員と英語科の学生が合同で民主的に運営する学術研究会で、筆者は、先生方に交じって何回も研究発表をさせていただいた。キャサリン・マンスフィールドやアーネスト・ヘミングウェイの短篇小説を、また、川端康成や谷崎潤一郎などの日本作家の作品を取り上げて発表し、先生方から貴重な御助言をいただいたことをまるで昨日のこのように今でも鮮明に覚えている。当時の筆者は、英語専攻の学生とは言え、直観的・本能的に、母語である日本語や日本文学・日本文化にもかなり拘った。

こうした状況下、四回生になったとき、大学院進学(当時の奈良教育大学には大学院は無か

ったので他大学の大学院進学)を強く勧めてくださったのが主任教授の宮田明夫(はるお)先生(明治42年生まれの英文学者。福原麟太郎氏の直弟子でサッカー文学の専門家。旺文社の大学受験ラジオ講座の講師としても著名)で、爾来47年が経過した現在も筆者は、黄泉の国におられる宮田明夫先生に心から感謝している。宮田先生のご助言・ご指導がなければ筆者は大学院には進学しなかったと思う(後に、近畿大学専任講師に筆者を強く推薦してくださったのも宮田先生である)。

(二)

進学した大阪教育大学大学院修士課程は、公式名称は「教育学研究科・英語教育専攻」ではあったが、この大学院は小規模ながら、いかにも当時の国立大学らしく、「講座制」を採っており、私が入学した講座は、正真正銘の英米文学の講座であった(教授と助教授の先生が一人ずつおられた)。そして、その講座所属の学生定員は一学年、たったの2名で、筆者にとってはとても居心地の良い上質の教育・研究環境であった(当時の大学院学舎は大阪市天王寺区にあり、自宅からも近くて、大学の図書館を利用するのに非常に便利であった)。桃山学院高等学校・専門学校・予備校等の英語の非常勤講師を兼務しながら、この修士課程・二年間の修業時代は、英米文学の作品読解に専念することができた充実の期間で、まさに至福のときであったと言えるだろう。

当時の大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程・英語教育専攻の三つの講座(「英語学」・「英米文学」・「英語教育学」)のすべての教授・助教授の先生方は、毎回、延々と長時間にわたって授業をしてくださり(たとえば午後1時から始まる授業が夕刻の6時過ぎまで続くのは当たり前であった)、さらに授業終了後も、今度は大学近辺(寺田町駅や天王寺駅周辺)の居酒屋にかしを変えて談論風発の授業は続いたのである。当時の国立大学ならではの豊饒な授業であったと思う(正規の授業以外にも、たとえば木曜日の夜に「木夜会」と称した読書会をボランティアで定期的を開いてくださったのが、当時の英語教育学講座の織田稔先生であった。織田先生は、他講座所属の筆者をも快く受け入れてくださり、筆者は、この読書会で本格的な英語学関連の本を集中して読破することができた。余談だが、織田稔先生の講座の修了生のひとりが、今をときめく英語学者の高見健一・学習院大学教授であることは特記に値するだろう)。

実は、その頃から既に構造主義からポスト構造主義へと文芸批評の流れは移行しており、文学テキストは作家個人の天才が産み出したものでは必ずしもなく、過去のさまざまなテキストの幾層にもわたる集積の賜物だ、という西欧の先進的文芸批評理論が当時の私たち英文学専攻者の身近に忍び寄っていた。だからであろうか、時代の変化を敏感に察知したリアリストの筆者は、修士論文で研究対象としたチャールズ・ディケンズ文学に関しても、作者ディケンズの個性や特異性を前面に出すことに躊躇いがあり、敢えて筆者は、インパーソナルな人文学的ア

アプローチを創案し、いっさい主観を排した、客観的な装いのレトリック論として修士論文を仕上げた。社会学者・中野収が学園闘争に明け暮れた私たち団塊の世代に対して、「言語文化の呪縛、言語文化の桎梏からの解放によって、感覚能力を復権し、表現行為に固執する若者たち」と評しているが（『朝日ジャーナル』1978年6月16日号／増大号、pp.29-36.）、言われてみればまさしくその通りで、当時の20歳代半ばの筆者は、一種のファッション感覚で、修士論文という自己にとっての愛しいコスモスの造形・創出という表現行為を、心から楽しみながら追求していたと思われる。

でもその後、英文学研究界には大きな地殻変動、つまりパラダイムシフトが起こった。英文学の作品は、もはやアングロサクソン系の作家だけのものではないという厳粛な認識である。英文学研究と称してアングロサクソン系の言語や精神・文化だけを研究対象にしているのかという疑義が生じたのである。これまで何の憂いも迷いもなく、たとえばシェイクスピアやディケンズといった、いわゆるカノン（正典）と呼ばれるものばかりを基本的に英文学研究の対象としてきた私たち多くの英文学徒は、V. S. ナイポール等の「英語圏文学」とか「英語文学」とか称せられる気鋭の作家たちの登場にいささか心の動揺を隠しきれなかった。こうした文芸思潮に身を置く私たちは、弥縫策ではない、核心を衝く清冽な文学研究法を根底から考究しなければならないと実感したが、しかし冷静に思い返してみれば、実はすでに19世紀にポーランド出身のジョウゼフ・コンラッドというエグザイルの作家が紛れもなくイギリス文学史に燦然たる足跡を刻んでいたのである。そして現に2017年10月、私たちは、日本出身の英国の作家カズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞のニュースに接した。カズオ・イシグロの場合、母語がどうのとか、国籍がどうのとかいう、そんなレベルを超えて、英語で書かれた彼の文学作品それ自体が高く評価されたのである。これぞ「英語圏文学」あるいは「英語文学」の最たるものであろう。

怒涛の勢いで変幻自在に流転するこのような文学研究界においてさえ、筆者は大学院・修士課程の若き日に、母語の英語を駆使して英国の文化や風俗を濃密に活写することに腐心したチャールズ・ディケンズ文学に出会えて良かったと、70歳の今、しみじみと述懐する。今後は、常に変遷する文芸批評の流れをもきちんと押さえつつ、それらを超克した視座に立って、ディケンズ文学のような古典の真髓を玩味していきたいと思っている。

(三)

修士課程修了後に進学したのが関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程英文学専攻である（当時の関西大学大学院の授業料は、学部とは違って極端に安く、そのせいかどうかはわからないが、英文学専攻のドクターコースの入試倍率は十数倍という高倍率だった）。その頃の筆者は、他大学の英語の非常勤講師をいくつも兼務しながら（ドクターコースの三年目からは常

磐会短期大学の専任講師を務めた)、関西大学大学院という私学特有の自由な精神が横溢した学術環境のなかで、伸びやかに、そして楽しく悠々たる態度で、英文学研究に没頭することができた。これまで学部も修士も共に国立大学を経てきた筆者にとっては初めての私学ということで、いくぶん不安はあったが、長き歴史と伝統に培われた関西大学の開放的で自由で気取らない、風通しの良い学風・学統が筆者には爽やかで新鮮で清々しく感じられ、己の意思で関西大学大学院ドクターコース受験を決断して本当に良かったとしみじみ思った（ドクターコース時代の同期生は、現在の谷口義朗・本学名誉教授／文学部特別契約教授である）。関西大学の先生方も院生たちも皆、他大学大学院出身の筆者を自然な形で、優しく、そして暖かく受け入れてくださり、おかげで筆者はしんから伸び伸びと、そして健やかに三年間のドクターコース時代を過ごすことができた。有難いことだと思っている。

とりわけ指導教授の大西昭男先生（ヘンリー・ジェイムズ文学を中心とする現代英米小説・批評が専門の英米文学者。関西大学専門部・国漢科を首席で出た後、京都大学文学部・英文科を首席卒業）の三年間のヘンリー・ジェイムズに関する授業が筆者にとってはすこぶる面白くてたまらなかった。大西教授は、当時はまだ50歳になったばかりの気鋭の学究ではあったが（後に、学長を5期連続15年務め、さらに理事長を1期4年務めた才人）、学識の守備範囲が非常に広い八面六臂の碩学大儒で、英米文学はもとより、英米以外の外国文学、漢学・漢籍、日本近世・近代・現代文学、哲学・思想史、能、狂言、歌舞伎、文楽、落語、詩吟、演劇、映画等、古今東西のありとあらゆる文芸・学芸・文化・歴史に通暁した「知の巨人」、そして「文士・文人」であった。特に日本の古典芸能に関しては、鼓は大倉流、謡曲・仕舞は観世流、笛は森田流と言った具合に、実際に舞台にも立っていた。また、水墨画は映山と号し、落語は竹林亭文雀を名乗っていた。柔剣道は総計五段であった。英米文学者ではあったが、なぜか卓越した中国語運用能力を有していた。

浩瀚な学問業績のある大西昭男教授の口から発せられる文芸批評ならびに文明批評は、筆者には千鈞の重みがあるように思われ、毎週木曜日の大西先生の授業が待ち遠しくてたまらなかった。優れて「知の人」である大西教授には、しかるに、偉ぶった態度は全く無く、院生に対する説教や小言もいっさい無かった。文学研究の基本的姿勢云々についての講釈など聞いたことが無い。筆者にとっては、大西先生の存在それ自体が学問の象徴のように感じられた。院生を決して束縛しない、真に自由な孤高の教養人であった。学問的徒党を組むことを好まない人であったと思う。それが当時の筆者には嬉しく、心地好かった。大学の非常勤講師ならびに短大の専任講師の仕事で忙しかった筆者は、大西先生の授業が終われば、一目散に部屋を飛び出して退散したものだが、大西先生から嫌味を言われたことは一度もない。不即不離というか、大西先生に対して畏敬の念を抱きつつも、程よい緊張感をもって先生から遠ざかっていた筆者である。

流行の各種文学理論を使えば、それなりにいかにも学術論文らしきものが生み出されること

は、かつて大阪教育大学大学院の修士論文作成過程で学習したものの、それが己の肌に合わないと感じ、心のありかを探求していた筆者は、文学の醍醐味をしんから味わい、心の奥底からほとばしる知的喜びが欲しかった。それを叶えてくださったのがまさに関西大学・英文科の重鎮・大西昭男先生である。魂の奥底にあるものをたえず直視していた大西先生がふと洩らす口吻と、勁健な筆によって書かれた先生の学術論文は、筆者の心に染みわたるものであった。大西昭男先生は、実は後に筆者の義父となり、二世帯住宅で一緒に暮らすことになるが、生涯を通じて、人文学研究の極意ならびに真髓を筆者に、言葉ではなく、身を以て教示してくださった。上述したように、訓戒や説教などはいっさい無かった。文学研究は好きなようにやれ、が先生の信条だったと思う。最高に素敵で魅力的な、膨大なエネルギーに満ちた、かっこいい華ある、艶然たる歌舞伎役者のような、まさに絵になる人だった(義父・大西昭男は、2005年2月に78歳で不帰の客となった)。

(四)

関西大学大学院ドクターコース満期退学と同時に、常磐会短期大学専任講師をも辞し、近畿大学教養部(当時)・専任講師となった。1979年(昭和54年)4月、筆者が満29歳の春である(因みにこの年に、筆者の敬愛する満30歳の村上春樹は、『風の歌を聴け』でデビューし、『群像』新人賞を受賞している)。当時の近畿大学は、創設者の世耕弘一氏の御子息・世耕政隆氏が総長を務めておられ(総長・世耕政隆先生は、同時に国会議員でもあり、医師・医学博士でもあり、詩人・文人でもあった傑人)、その世耕政隆総長率いるところの文芸雑誌『近代風土』(近畿大学出版部)の編集委員に若輩の筆者が抜擢された。この文芸誌の執筆陣ならびに編集委員は、世耕政隆総長の華麗なる人脈所以で、錚々たる高名な有識者で構成されており、30歳代の若造の筆者は、常に末席を汚していた。後に関西大学文学部英文学科へ異動する満41歳まで筆者は、近畿大学において、この大役をおおせつかったが、いつも編集委員の先生方から個人的に言われ続けたのは、「論文執筆においては、他者の引用ばかりに頼らず、己の言葉で堂々と文章を綴れ」、ということだった。年に数回、編集委員会のと、夜遅くまで先生方と会食したもののだが、特にマスコミ関係ご出身の先生方からのこの種の貴重な御助言は、若き日の筆者には大きな影響力を持っていたと思う。学術論文執筆の際には、安易に「註」をつけるのではなく、常に自家薬籠中のものにすべく煩悶しながら文章を書け、という教えであった。自分の体内から自然と滲み出る文章を目指せ、という教示であったと思う。現に、感化されたあの頃の筆者の論文には、「註」が少なくなっていたのを覚えている。

近畿大学教養部の専任講師・助教授の12年間は、今から思えば、筆者にとっての貴重な充電期間であった。近畿大学における筆者の専任教員としての本来の職務は、「全学共通教養科目の英語」を学生に教えることであったが、近畿大学は、古典とも言うべきヴィクトリア朝時代の

英国小説研究に専心することを許してくれる、おおらかな寛恕の大学であった。これはひとえに、懐が深く識見に富む教養部長・綱澤満昭先生（当時）の教育研究理念の賜物である。政治学ならびに政治思想史ご専門の綱澤先生からは常々、「言語」の背後に潜む文化・歴史・思想等に注視すべきことを教えていただいた。筆者とは九歳しか歳が違わない当時の若き俊才・綱澤満昭教養部長との邂逅が、筆者のその後の大学人としての生き方に多大な影響を及ぼしたであろうことは間違いない。学術研究と学内行政の両立をみごとに体現しておられた綱澤先生である。近畿大学で綱澤先生と出会えたことは本当に良かったと、今、しみじみ思う。

（五）

上記の「職歴」欄に書いた通り、満41歳の4月に、近畿大学教養部から関西大学文学部英文学科（当時）に異動した。最初の一年間は助教授で、翌年、満42歳で教授に昇格した。その後は、「学内移籍」の連続となった（文学部英文学科・3年間→新設の総合情報学部・4年間→文学部英語英文学科・1年間→新設の文学部外国語教育研究教室・1年間→新設の外国語教育研究機構・9年間→新設の外国語学部・10年間）。筆者は、おそらく関西大学のこれまでの全専任教員のなかで一番多く学内移籍を繰り返したのではないだろうか。

ところで筆者が関西大学文学部英文学科に赴任した満41歳の時、戦後の関西大学英文学科の礎を築いた泰斗・堀正人先生の学統を脈々と受け継ぐ教授陣（京都大学に非常勤講師として出講しておられた時の堀先生の京大での教え子が大西昭男先生で、大西先生は京大卒業後、戦後の関大英文科の助手第一号となる。そしてその後に連なるのが関大英文科の堀先生の弟子である多田敏男先生、名取栄史先生、田中昭平先生、安川昱先生等）が英文学科におられ、先生方は、関西大学英文学科が果たしうる役割、ならびに果たすべき役割をしかと見据えておられたと思う。英文学科に漂う高遠な学風を肌で感じ取った筆者は、福運を授かったことを素直に喜び、英語英米文学研究にさらに一層、果敢にチャレンジしようと肚を据えた。

しかし、前述の如く運命のなすがままに学内移籍を繰り返しながら満50歳近くになった頃、筆者は、己自身の英文学研究者としての姿勢に自信が持てなくなってしまった。日々の主たる業務である英語教育実践学に身命を賭しつつ（当時の筆者は「英語科教育法」をも長きに亘って担当していた）、なおかつチャールズ・ディケンズ文学を中心とした英国小説研究にも心血を注いでいたが、後者の「日本における英文学研究の意義」に疑念を抱くに至ったのである。国文学研究とは違って、英文学研究の場合は隔靴搔痒の感が否めず、筆者は呻吟し、逡巡し続けた。そして、苦しみ悶えた後、筆者が編み出したのが、「英語教育と英文学の絶妙の融合・統合・融和」である。「英語教育の応用篇としての英文学のありよう」、といった発想に辿り着いたのである。爾来、筆者のライフワークは、「実践知性としての英文学研究」となり、「言語、文学、文化、思想、歴史、哲学、映画、演劇、古典芸能、美術、そして英語教育」の想到に時

間を割く毎日となった。

こうして学問研究の軸足を見定めた筆者は、多忙となった学内行政的任務(外国語教育研究機構長・大学院外国語教育学研究科長・外国語学部初代学部長等)と並行しながら、「古典」の世界に没頭するようになった。「古典」に対するこれまでの疑心暗鬼の状態を脱して、真正面から自信を持って「古典」と向き合えるようになったのである。実践的英語教育主流のこの御時世において、果たして古典などに何の意味があるのだろうかという疑心が消え、19世紀英国小説、特にチャールズ・ディケンズの小説の精読・熟読に心血を注いだ。その際、原書をしっかりと読んだという証しに、語学ノートを作成することにした。鉛筆書きの汚い雑記帳だが、今ではそのノートの冊数が増え、それらは筆者にとっての生きる上での自信の源、すなわち宝物・財産となっている。必ずしもディケンズ文学には限らないが、そのような「古典」の読解から、現在に通ずる普遍的真理や人生の叡智を探り当て、混迷の時代を生きる私たちにとっての曙光としたい、と切に願っている。

(六)

筆者は、大学院修士課程時代に英国の国民的作家チャールズ・ディケンズの作品を修士論文で扱った。爾来、ディケンズは筆者の人生観・世界観に多大なる影響を与えたが、彼は基本的には、己の作品についての解説等は書いてはいないし、自伝的エッセイも残してはいない。ディケンズは、専ら想像力の産物である「物語」を世に出すことに専念したストーリーテラーで、作品を咀嚼する権利をすべて読者に付与した。ただ、ディケンズの多くの書簡は存在する。たとえば友人のジョン・フォスターに宛てた手紙で創作上の相談をしており、そうした両者のやり取りの痕跡から後世の私たちは、ディケンズ文学の源泉を窺い知ることが可能となる。

ディケンズ文学から学んだことを一言で集約することはできないが、対象を異なる角度から観察するという複眼的思考、すなわちパララックス(視差)の大切さを知り得たことは筆者にとって意義深いことだと思う。これは日本の世阿弥の言う「離見の見」と同じで、離れたところから客観的・重層的に対象を見るという姿勢である。このように長年に亘って英米文学作品読解を通して身につけた筆者なりのメチエを、受講生である学生たちの実人生に活かすことができればと願いつつ、70歳の今、大学教員人生最後の教壇に立っている。「実践知」の追究に邁進したいと思う。

筆者の場合は、人口に膾炙する著名な文豪・ディケンズなどとは違い、地味で無名の一大学教員にすぎないゆえ、名立たるディケンズのことを意識する必要など全く無いのだが、否、そのこと自体がおこがましいが、このたび筆者の退職に際して退職記念号を出して下さるということで行くぶん気負い過ぎた筆者は、このような自伝めいたものを書いてしまった。おそらく他者から見て、この種のものほど面白くないものはないだろう。一退職者である老人・宇佐

見太市の単なる独り言・呟きにすぎないではないかと、きっとお叱りを受けるだろう。神のみもとの天の御国にいるディケンズの嘲笑をも買うにちがいない。

ただし筆者としては、凡庸なひとりの大学専任教員が四十数年にわたってとほとほと歩んできたことをしたためたこの拙い自書を、今や孤絶覚悟の筆者の残された「人生の道標」にしたいと思っている。それゆえに、これまでの自己の苦悩と問いを決して美化せずに正直に綴ったつもりである。今後の「生」の指針・指標にしたいという筆者の陋劣な欲求から生まれたこの長尺の自書に関して、読者諸賢のご寛恕をいただければ幸いである。

